

論文

茶道資料における検索手段の整備に関する 一考察

—幽清会川浪家文書を事例として—

A Reflection on the Development of Finding Aids for Japanese Tea-Ceremony Documents: A Case Study of the Yuseikai Kawanami Family Papers

中村 友美

Tomomi Nakamura

キーワード

編成記述、検索手段、茶道資料、アイテムレベル記述、利用者指向

arrangement and description, finding aids, Japanese tea-ceremony documents, item-level description, user-centered design

本稿は、茶道という文化活動から発生する記録をアーカイブズ資料として捉え、利用を導くための検索手段を検討するものである。個人文書として存在する茶道資料は各地に散在しているとされるが、資料へのアクセスの困難さ、口伝による文化継承という閉鎖的な特性に起因して、研究資源としての利用は進んでいない。こうした課題を解決するため、本稿では茶人・川浪宗真の作成・収受した「幽清会川浪家文書」を事例に、段階的の整理論に則った編成記述を踏まえ、検索手段を提示する。整理にあたり重視するのは、茶道資料の文化的特性に対する考慮と、利用者指向のアプローチの二点である。結果、本資料群は階層構造単位の記述に加えて、アイテムレベルのコンテンツ情報の記述が有用であることを指摘した。また、茶道具への関心と利用の実態を踏まえて作成した「茶会記リスト」では、モノ・場所・人のコンテキストの変遷を追求できる検索手段を実現した。

This article aims to consider Japanese tea-ceremony documents within the framework of archival science and design finding aids to access these documents. There is a problem with using Japanese tea-ceremony documents as a research source, due to the closed nature of cultural accession. To solve the problem, this article discusses finding aids with the arrangement and description of the Yuseikai Kawanami family papers. The papers were created and received by Sohshin Kawanami, who was a grand tea-master and resided at Okayama prefecture. The arrangement and description of the documents is carried out by following the gradual processing methodology, and it is possible to obtain information about the contents, contexts, and the structure of the

documents. A particular focus of this article is the design of finding aids which are practical and user-centered through an understanding of the documents. The investigation and analyses of the documents result in item-level descriptions, in addition to hierarchical, multi-level descriptions for each level. Finally, this article concludes with a discussion on the finding aids by using information provided in the tea-ceremony diaries. Information, collated from many and varied tea-ceremony diaries, enables the identification of the contexts of the tea-making utensils, places, and people involved in tea-ceremony.

1 はじめに

1-1 研究の目的

茶の湯を大成した千利休の孫、千宗旦は、茶道の修養について「茶の湯とは耳にて伝え、目に伝え、心に伝え一筆もなし」¹⁾という道歌を残している。「伝える」という言葉が繰り返されていることに表されるように、茶道の伝承においては師から弟子へ直接伝えられる「口伝」が重んじられてきた²⁾。その一方で、点前が複雑化すると共に数が増えていく形で発展を遂げたことを背景に、今日の茶道の根幹となる「わび茶」が成立する段階から「聞き書き」が伝授の形式として取り入れられていたとされる³⁾。「聞き書き」とは、「おもに茶の湯の先達から聞いた話を書きとめたもの」であり、点前・作法以外にも、道具、茶室、茶人や道具の逸話などが含まれる⁴⁾。これらの記録は、備忘録風に私的な書付として残され、あるいは出版という形でまとめられた⁵⁾。口伝の裏側にある点前・作法に関する記録に加えて、茶道具の伝来や所持者について記された「名物記」、茶会の日付・場所・使用した道具を記した「茶会記」、茶室の設計図等、茶道に関する多様な記録が残され現存している。これらの記録は「茶書」と呼ばれ、茶の湯を理解するための役割を果たすと同時に、研究にあたって高い資料的価値を持つものとされてきた⁶⁾。

茶書に関する先行研究は、筒井紘一氏の『茶書の系譜』（文一総合出版、1978年）及び、同じく筒井氏による『茶書の研究－数寄風流の成立と展開』（淡交社、2003年）に代表される。筒井氏は世界最古の茶書である『茶経』から近現代の茶道研究までを取り上げ、茶

1——深田香実『喫茶余録二編下』、三友堂東八、1835（天保6）年、8頁。原文では「茶の会とは耳にて伝へ目につたへところに伝たへ一筆もなし」であるが、表千家のホームページでは、「茶の湯とは、耳に伝えて目に伝え、心に伝え、一筆もなし」と伝えられてきたことが紹介されている。表千家ホームページ、<http://www.omotesenke.jp/list5/list5-1/list5-1-4/>（最終閲覧は2019年12月3日）。

2——熊倉功夫「秘伝の思想」、『熊倉功夫著作集第一巻 茶の湯－心かたち－』、思文閣出版、2016年、220頁。初出は井上光貞・上山春平監修／守屋毅編集『大系 仏教と日本人7 芸能と鎮魂』、春秋社、1988年。

3——筒井紘一『茶書の系譜』、文一総合出版、1978年、29頁。「わび茶」は禅の精神性と深く結びついた茶の湯の様式。15世紀の後半奈良の珠光によって創始され、16世紀に入り武野紹鷗によって発展、その後紹鷗の弟子である千利休によって大成されることになる。

4——原田茂弘『茶書は語る』、淡交社、2016年、39頁。

5——筒井、前掲31頁。

6——筒井、前掲9-12頁。

書の成立過程、内容、変遷を論じている。筒井氏は茶道の範囲が広大であることを述べ、「茶道論と批判書、点前、器物、茶室と露地、会記、茶人と逸話、(略)煎茶や製茶」といったジャンル別分類による茶書研究を提唱している⁷⁾。茶道の網羅する領域の広さを示すように、茶道研究の成果は数度の「茶道全集」の刊行に結実している⁸⁾。茶書の翻刻と解題の進展により書誌学的研究が進み、茶道史、茶道人物史、点前の成立史、茶道具の変遷等ジャンル別の集積が現れ、歴史資料としての茶書の価値は高まった。しかし、茶書の発生する活動や出所に注目した考察は限定され⁹⁾、コンテキストを重視したかたまりとして茶道資料を捉えた研究は行われてこなかった。

また、茶道資料は家元によって組織的に継承されるものもあるが、個人で所有する資料が多数存在するとされる¹⁰⁾。個人蔵のこれらの資料はほとんど調査が行われていない状況にあるとされ、所有者である茶人の死後、家政文書に混在して秘蔵されている茶道資料は各地に散在しているものと推測される。資料へのアクセスの困難さ、口伝による文化継承という閉鎖的な特性に起因して、個人文書として存在している茶道資料は研究資源としての利用が進んでおらず、特に近代以降の茶書に関しては総体的な研究が少ない。

以上の課題を解決するため、本稿は従来の茶道研究では対象とされてこなかった近現代茶道資料をアーカイブズ資料として捉え、利用を可能にするための検索手段について考察する。口伝の伝統の中で残された茶道資料の意義を尊重しつつ、茶道資料の特性に適し、利用者と資料を結びつける検索手段とはどのようなものであるか検討していきたい。

1-2 研究の対象と方法

「茶書」とは「何らかの意味で茶に関する記述がなされているもの」¹¹⁾と定義されるが、茶道に関連するすべての記録を含むわけではない。本稿では従来の茶書の範疇には含まれていない茶道資料の価値に注目し、茶道という文化活動から発生する記録を「茶道資料」と総称し、茶書に加えてこれらも対象とする。分析の対象として取り上げるのは、裏千家名誉師範を務め岡山県を拠点に活動した茶人・川浪宗真(1901(明治34)–1985(昭和60))の作成・収受した記録「幽清会川浪家文書」(以下、川浪文書)である。

本稿では「段階的整理論」¹²⁾で提示される、四段階の整理(第一段階:概要調査、第二

7——筒井、前掲22頁。

8——例えば、『茶道全集』全15巻(創元社、1935–1937年)、『新修茶道全集』全9巻(創元社、春秋社、1951–1956年)、『茶道古典全集』全12巻(淡交社、1956–1962年)がある。

9——竹内順一氏・矢野環氏の「名物記の生成構造－実見と編集のはざま」は、茶道具の伝来や所持者について記された「名物記」を機能論・目的論から検証した研究であり、竹内氏は「俎上にのぼす名物記についてはすべて、何のために、誰がいつ作成したか、という観点をかたときも忘れなかった」と述べ、この研究視座は「斬新であると自負する」と結論づけている。竹内順一、矢野環「名物記の生成構造－実見と編集のはざま」、筒井絃一編『茶道学大系第十巻茶の古典』、淡交社、2001年、46–62頁。

10——現在伝えられる茶書の総数は、個人所蔵のものも含めると一万点を越すと推定される。筒井絃一『茶書の研究－数寄風流の成立と展開』、淡交社、2003年、134頁。

11——筒井、前掲133頁。

12——安藤正人氏によって提唱されたアーカイブズ整理論。安藤正人『記録史料学と現代－アーカイブズの

段階：内容調査、第三段階：構造分析、第四段階：多角的利用の検討）に則り資料整理を行い、その課題を考察する。第四段階の「多角的検索手段の作成」については、「史料の編成・記述を踏まえたうえで、記述のみでは十分に対応できない、さまざまな視点からの検索を可能にする手だてを整えること」と定義される¹³⁾。これを実現するため、本稿では茶道資料にとって実用性の高い検索情報とは何であるかを検討していくこととしたい。

2 幽清会川浪家文書の調査と編成記述

本章では、川浪文書の主たる作成者である川浪宗真（以下、宗真）の経歴と川浪文書の来歴について述べ、概要調査・内容調査の過程と結果をまとめる。調査を踏まえ、構造分析、内容分析を行い、川浪文書に適したアーカイブズ記述に関する考察を述べる。

アーカイブズがコンテンツ・コンテキスト・構造を保ち、真正で信頼できる証拠として機能するためには、外的完全性（出所）と内的完全性（原秩序）を保護することが必要であるとされる¹⁴⁾。編成の基礎となるのは、「アーカイブズ整理の二大原則」と「アーカイブズ保存修復の原則」の2つの原則である。「整理の二大原則」は、ひとつの出所をもつ文書群は、他の出所をもつ文書群と混同して整理されてはならないとする「出所原則（The principle of respect for provenance）」及び、出所を同じくする文書群の中で、それを生んだ機関・団体の活動の体系を反映している原秩序を尊重して残さなくてはならないとする「原秩序尊重の原則（The principle of respect for original order）」を指す¹⁵⁾。また「保存修復の原則」は、「可逆性の原則」「安全性の原則」「原形保存の原則」「記録の原則」の4つにまとめられる¹⁶⁾。これらの基準に沿って段階的整理を行い、各段階において目録などの検索手段を整えることは、利用のための準備作業となる¹⁷⁾。

2-1 川浪宗真と幽清会川浪家文書について

本節では、宗真の孫であり相続人の川浪百合子氏への聞き取り等から明らかになる、宗真の経歴及び川浪文書の来歴を述べるが、はじめに川浪百合子氏と筆者の面会が実現するまでの経緯について触れておきたい。本研究においては、川浪文書のコンテキスト記述を充実させるため、資料調査と並行して宗真に縁がある人物についての調査に取り組んだ。宗真が岡山市を中心とする地域で多くの茶会を開催していたこと、晩年（1985年）まで岡山市で茶道活動を行っていたことから、存命する弟子や宗真を直接知る人物が同地域に存

科学をめざして—』、吉川弘文館、1998年、111-112頁。

13— 森本祥子「アーカイブズの編成と記述標準化—国際的動向を中心に」、国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学下巻』、柏書房、2003年、238頁。

14— Millar, Laura A., *Archives: Principles and Practices* 2nd ed., London: Facet Publishing, 2017, p. 49.

15— Milton, Chapter 8: Arrangement & Description, Bettington, Jackie, Eberhard, Kim, Loo, Rowena, Smith, Clive eds., *Keeping Archives* 3rd ed., The Australian Society of Archivists, 2008, p. 253.

16— 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会『文書館用語集』、大阪大学出版会、1997年、123頁。

17— 安藤、前掲110-112頁。

在することが推測された。そこで、裏千家の全国組織である淡交会の岡山支部¹⁸⁾へのコンタクトを試みたところ、宗真についての手がかりを得ることができ、さらには支部内の人物の計らいにより川浪百合子氏とのコミュニケーションが進展、面会が実現した。

宗真は1901（明治34）年に生誕、父の笠井信良氏は同和鉱業片上鉄道の支配人を務めた人物である¹⁹⁾。1917（大正6）年に裏千家に入門し、裏千家名誉教授守屋宗英氏の下で修業に励んだ。守屋氏は川浪文書に含まれる、雪月花、茶通箱、唐物、台天目、盆点、和巾点の6点の茶道許状において取次者として名前を確認することができ²⁰⁾、川浪文書中の守屋氏の追悼茶会の記録からも師弟関係の深さを推し量ることができる。川浪百合子氏の証言によると²¹⁾、宗真は裏千家業躰山藤宗山氏にも師事したとのことである²²⁾。1947（昭和22）年に奥秘とされる十段を取得、1974（昭和49）年には名誉師範を授与され、翌1975（昭和50）年から参与を務めた²³⁾。

宗真は岡山市を拠点に活動し、茶道教授者として弟子を育成し、岡山県立岡山朝日高等学校において茶道指導に携った²⁴⁾。また、地域で度々茶会を主催するなど、生涯に亘り茶道の教育・普及活動に従事したことが知られる。岡山市の自邸内に茶室を開いた際には、裏千家第14代家元淡々斎から「幽清庵」という茶室名を与えられている。その後、茶道の活動の基本行動単位である社中を名乗る際には「幽清会」を団体名として用いたものと推察され、この名称は宗真－宗睦（宗真娘）－百合子氏（宗睦娘）と川浪家で代々継承されている。

宗真の夫の川浪良太氏は映画監督であり、『日本映画監督全集』には「川浪の死後、良子未亡人は岡山市の実家たる笠井家の後ろ立てで茶道などをたのしんでいる。」との記述が確認される²⁵⁾。「川浪宗真」は茶道活動における呼称であり、本名は「川浪淑子」である。文書においては、旧姓である「笠井淑子」名のものも見られる。1985（昭和60）年2月16日逝去。

18——淡交会の正式名称は「一般社団法人茶道裏千家淡交会」。1940（昭和15）年に裏千家家元の直轄団体として結成され、裏千家茶道の点前作法の統一において、家元の指導方針を守り、伝えることを目的に活動を行っている。現在は全国に17地区、165支部・2支所が設置されている。裏千家ホームページ、<http://www.urasenke.or.jp/textc/tan/>（最終閲覧は2019年12月3日）。川浪文書の茶会記からも、宗真が淡交会岡山支部と関わりがあったことが判明している。

19——商業興信所編『日本全国諸会社役員録第28回』、商業興信所、1920年、下編539頁。

20——許状は修道の課程ごとに家元によって発行される文書。ここで挙げた雪月花以下6点の許状は中級に分類される。

21——川浪百合子氏の証言は、2018年7月15日に行った聞き取り調査に基づくものである。

22——業躰とは裏千家に伝わる茶道の点前や考え方を家元の側で修業し、家元での指導を国内外に伝える者を指す。裏千家業躰奈良宗久氏インタビュー記事、https://ontrip.jal.co.jp/article/tips/interview_nara/（最終閲覧は2019年12月3日）。

23——『淡交』昭和60年4月号、1985年、71-73頁。

24——岡山県立岡山朝日高等学校の茶道教授者は川浪家によって継承されており、現在は川浪百合子氏が指導にあたっている。

25——奥田久司、岡部龍、森崎東、降旗康男、前田陽一『日本映画監督全集』、キネマ旬報社、1976年、130-131頁。文中の「良子」は「淑子」の誤記である。

本稿で対象とする川浪文書は、宗真及び継承者である川浪宗睦の没後川浪家から流出し、2018年4月に茶道史研究家の岡宏憲氏がネットオークションで購入したものである。文書は宗真が茶道を中心とする活動において作成、収受したものであり、宗真が私的に保管していたものと思われる。宗真逝去の後、川浪家の茶道活動は宗真の息子の配偶者である川浪宗睦に引き継がれた。後に触れるが文書の一部には宗睦の文書も含まれていたことから、川浪文書全体は宗睦により保管され続けたものとみなすことができる。家文書に分類される文書であるが、茶道関連のみがまとまった形で残され、家政資料などは含まれていないため、宗真、宗睦いずれも茶室あるいは茶道具に近い場所で保管していたと推測される。宗睦逝去の後に文書を古物商が入手するところとなり、岡氏が購入するに至った。岡氏の手元に文書が渡った時点では、段ボール一箱に未整理で入れられた状態であった。その後、「茶書研究会」²⁶⁾を機縁として筆者が資料整理を手伝うこととなり、整理及び目録の作成を行ったこと（後述する一次調査）が本研究のベースとなっている。

茶道資料においては、茶道具に代表されるモノ資料が保存や利用の上でも主体となってきた²⁷⁾。美術的にも価値の高い芸術品、工芸品が多いことから、美術館や博物館などの収集機関では道具を中心とした保存・展示が行われてきたが、川浪文書にはモノ資料は含まれない。

また、川浪文書は宗真の茶道活動の実態の一部である。例えば、茶道許状については裏千家の定める「許状種目と資格」²⁸⁾によると入門を含め16の段階が存在するが、川浪文書に含まれるのは初級から中級に分類される8種目のみである。さらに、茶道情報誌に掲載された茶会記録には、川浪文書には記録が残されていないが、宗真が関与したと考えられる茶会が少なくとも3会記載されている²⁹⁾。

2-2 調査過程

川浪文書の調査は、文書の所有者である岡氏と筆者による一次調査、筆者単独での二次調査の計二回の調査を実施した。資料の全体概要を掴む一次調査では資料の内容確認と写真撮影、保存処置、概要目録の作成を行い、二次調査ではアイテム単位の内容調査に基づく記述に取り組んだ。一次調査は段階的整理で言うところの概要調査、二次調査は内容調査に位置づけられ、アウトプットは概要目録、内容目録としてまとめられるものである。

26——2012年に設立された茶の湯研究の活発化を目的とする研究会。未公開の茶書・茶人の消息・茶会記等の発掘・翻刻を中心とした活動を行い、研究成果は研究会誌『茶書研究』にまとめられている。

27——熊倉功夫氏は、「茶の湯の資料として最大のものは道具そのものである」と指摘している。熊倉功夫「茶の湯史料論」、熊倉功夫・筒井紘一・中村利則・中村修也『史料による茶の湯の歴史（上）』、主婦の友社、1994年、1頁。

28——裏千家ホームページ、<http://www.urasenke.or.jp/textb/culic/index.html>（最終閲覧は2019年12月3日）。

29——川浪宗真が裏千家流の茶人であることから、裏千家と縁の深い出版社である淡交社から刊行されている『茶道月報』『淡交』を対象に茶会記の調査を行った。範囲は宗真の活動時期との重なりを踏まえ、『茶道月報』は1941（昭和16）年4月号から1950（昭和25）年2月号まで（1944（昭和19）年7月から1948（昭和23）年4月までは休刊のため除く）、『淡交』については1951（昭和26）年1月号から1986（昭和61）年12月号までとした。結果、川浪文書と照合できた茶会は3会、照合できなかった茶会は26会であった。

なお、調査時点では川浪宗真に対する知識も不十分であったため、その時点での資料群に合わせた調査手法をとって行ったが、その整理の経緯を残す意義から筆者の整理の思考も併せて記載している。

2-2-1 一次調査（概要調査）

一次調査開始の段階においては、川浪宗真についての知見はほとんど得られていない状況にあった。唯一の情報源となったのは裏千家の機関誌である『淡交』昭和60年4月号に掲載された「稽古場訪問」の記事であるが³⁰⁾、出所に関する情報が十分ではなく文書群を構造的に捉えることが困難であったため、一次調査は資料の全体概要の把握を目的に内容（主題別）分類を試みた³¹⁾。

整理にあたっては、資料を段ボールから取り出し、一点ずつ内容の確認を行い、同種のまとまりを「分類」として扱い資料を年代順に並べ、目録記述及び写真撮影を行った。目録作成にあたり採録した記述項目は、文書番号／資料名／作成時期／点数／分類／備考の6項目である。一次調査における分類は表1に示す7分類である。

調査結果はMicrosoft® Office Excelを用い、上記項目の記述を行った。「備考」には、文書作成者（辞令）、修道内容（許状）、茶会名（茶会記）を記載した。サビの付いたクリップはこの段階で外し、記述及び撮影を終えた資料は資料番号を付した封筒に収め、再び段ボールに戻した。また、資料の作成時期に基づき宗真の簡易年表を作成した。

2-2-2 二次調査（内容調査）

一次調査において物理的整理と最低限の保存処置が一通り完了したため、二次調査にあたっては分析的整理に重点を置くこととし³²⁾、まず編成のための記述項目の検討に取り組んだ。概要調査を終えて資料の概要把握と内容分類は果たしたものの、川浪宗真という人物に対する理解は十分ではなく、コンテキスト理解を深め文書の全体構造を把握するには情報が乏しかったため、資料一点一点の内容を仔細に見ていく必要があると判断した。そこで、作成者・作成機関、形状、寸法等調査項目を追加し、既存項目についても再検討を加え、詳細な内容目録の作成を行った。一次調査で6項目であった調査項目は、二次調査では11項目となった。一次調査及び二次調査で採録した記述項目は表2に示すとおりである。

内容目録においても概要目録と同様にExcelを用い記述を行った。茶会の日付、場所、

表1 ――一次調査における分類

1	辞令
2	許状
3	茶会記
4	御茶入日記
5	花月（稽古）
6	煎茶
7	華道小原流許状

30――1984（昭和59）年12月に宗真自邸で行われた取材に基づくものである。生没年及び、裏千家入門以降の修道課程の一部が判明し、多くの弟子を取り積極的に茶道指導を行ったことが認められる内容である。

31――内容分類は文書に書かれた内容（主題）によって項目を設定し分類する方法である。歴史資料の分類において取り入れられてきた手法であるが、安藤氏は越後国岩手村佐藤家文書を事例に複数の視座から主題分類の問題点をまとめている。安藤、前掲55-72頁。

32――安藤氏は、記録史料の整理を「物理的整理」と「分析的整理」に大別している。「分析的整理」は、記録一点一点の中身を調べ記録史料群の全体構造を分析して、目録などの検索手段を整備することとされる。安藤、前掲31-32、110頁。

席主名³³⁾、用いられた茶道具などが記された「茶会記」には、茶道具の利用と組み合わせに関する情報、及び道具固有の情報（産地、素材、銘³⁴⁾、作者、所有者の変遷、箱書き）が多量に含まれる。茶道においては道具に関する識別情報が重視され、茶道資料の検索手段の整備にあたり有益なデータになることが見込まれたため、二次調査においてすべての茶会記の文字起こし作業を行った。

目録の詳細化に伴い新たに知られた事項を加えることにより年表についても更新を行い、資料の作成年月日を基準に宗真の茶道活動を記述した（表3参照）。

表2 —— 一次調査及び二次調査記述項目対比表

一次調査	二次調査
1) 文書番号	1) 資料番号
2) 資料名	2) 資料名
	3) 資料概要
3) 作成時期	4) 作成年代
	5) 作成者・作成機関
	6) 形状
	7) 寸法
	8) 状態
4) 点数	9) 数量
5) 分類	10) 分類
6) 備考	11) 備考

2-3 幽清会川浪家文書の構造と内容分析

分析の整理は、記録発生母体の組織と機能を反映した体系的秩序の再構成に取り組み、目録などの検索手段を整備することが目標とされる³⁵⁾。一次調査、二次調査を経て記録発生母体、すなわち川浪宗真の活動について機能による検討を行った結果、「茶道関連」と「茶道関連外」に分けて捉えることができると考えた。「茶道関連外文書」に含まれるものは「華道許状」と「和歌集」である。いずれも茶道と関わりの深い文化活動であるが、「川浪宗真」「幽清会」という名称は茶道活動においてのみ名乗ることができる別名であるので、川浪文書の編成上、「茶道関連」と「茶道関連外」は異なるコンテキストを持つものとして扱うこととした。

「茶道関連文書」に含まれるのは、①学校の授業を嘱託する「辞令」、②修道課程ごとに稽古を行うことを許可する「許状」、③宗真が覚え書きとして記した点前の記録、④お茶を購入した際の茶の種類・数が記された「御茶入日記」、⑤「茶会記」の5種類である。資料分類ごとのアイテムレベルの点数及び作成年幅を表4に示す。

33——茶会の主催者のこと。亭主とも呼ばれる。
34——茶の湯の道具に付けられた名のこと。道具の形や色合いなどの特徴を何かに見立てたり、作者、所有者、産地、逸話、和歌や俳句にちなむものなど様々である。表千家ホームページ、「茶の湯用語集」、『銘』、<http://www.omotesenke.jp/cgi-bin/yogoshu.cgi>（最終閲覧は2019年12月3日）。
35——安藤、前掲111頁。

表 3 —— 川浪宗真茶道関係活動年表

西暦	和暦	月	年齢	川浪宗真動向（先頭の数字は日付）	出典
1901	明治34		0	香川県高松市に笠井信良氏の子として誕生	
1917	大正 6	12	16	10：入門・小習の許状	川浪文書／淡交昭和60年4月号
1919	大正 8	11	18	27：和気郡片上町に片上鉄道株式会社設立・支配人笠井信良氏	同和鉱業株式会社創業百年史／日本全国諸会社役員録第28回
1932	昭和 7		31	川浪良太氏ご逝去	日本映画監督全集
1937	昭和12	2	36	華道小原流入門・三級・一級・脇教授・准教授の許状	川浪文書
		3		華道小原流正教授の許状	川浪文書
1938	昭和13	1	37	1：千代のしをりに	川浪文書
		2		17：雪月花・茶通箱・唐物・台天目・盆点の許状	川浪文書
1939	昭和14	3	38	1：和巾点の許状	川浪文書
1941	昭和16	8		17-27：第29回茶道夏期講習会に出席	茶道月報昭和16年10月号
1942	昭和17	8	41	11：花月の稽古	川浪文書
1943	昭和18	4	42	1：岡山県第二岡山高等女学校の辞令	川浪文書
		8		29：今日庵・第二回学校茶道教授者錬成会に出席	川浪文書／茶道月報昭和18年10月号
1944	昭和19	5	43	31：岡山師範学校の辞令	川浪文書
		12		31：岡山医科大学の辞令	川浪文書
1945	昭和20	3	44	31：岡山青年師範学校の辞令	川浪文書
1946	昭和21	5	45	31：岡山師範学校の辞令	川浪文書
		5		31：岡山医科大学の辞令	川浪文書
1947	昭和22		46	十段取得	淡交昭和60年4月号
1950	昭和25	8	49	17：国清寺観音会月釜	川浪文書
1952	昭和27	3	51	17：国清寺観音会月釜	川浪文書
		5		10：黒住皐月茶会	川浪文書
1953	昭和28	6	52	18：黒住教献茶添釜	川浪文書／淡交昭和28年12月号
1954	昭和29	7		17：国清寺観音会月釜	川浪文書
		11		7：高田宗紀主催茶会	川浪文書
1956	昭和31	1	55	17：国清寺観音会月釜	川浪文書
		2		25：景福寺梅見月月釜会	川浪文書
		5		17：国清寺観音会皐月茶会	川浪文書
		7		8：淡交会岡山支部夏季研究会添釜	川浪文書／淡交昭和31年9月号
		8		7：後楽園朝茶の会	川浪文書
1958	昭和33	4	57	13：円通寺聖良寛奉賛茶会	川浪文書
1960	昭和35	2	59	19：協賛茶席	川浪文書
1961	昭和36	5	60	14：後楽園茶摘茶会	川浪文書
1962	昭和37	5	61	29：伊勢神宮献茶式	川浪文書／淡交昭和37年8月号
		9		30：朝日校文化祭	川浪文書
		10		17：国清寺観音会月釜 25：慶福寺守屋秋追悼茶会	川浪文書
		11		琴浦文化祭	川浪文書
1963	昭和38	2	62	24：淡交会研究会添釜	川浪文書
1974	昭和49		73	名誉師範	淡交昭和60年4月号
1975	昭和50		74	参与	淡交昭和60年4月号
1984	昭和59	12	83	『淡交』の「稽古場訪問」の取材を受ける（掲載は昭和60年4月号）	淡交昭和60年4月号
1985	昭和60	2	84	16：逝去	淡交昭和60年4月号

川浪文書は宗真が作成または収受した資料群であるが、茶会記の中に、宗真の継承者である川浪宗睦の作成したものが混ざっているのが確認された。数量が少なく宗真の茶会記に含めて扱うことも考えられたが、「幽清会」の名称と茶道活動は川浪家に代々引

き継がれており、「幽清会川浪家文書」は現在・未来において新たな記録を取得する余地を残していると言える。そのため、宗睦に関係する記録は「幽清会川浪家文書」の一つの単位とし、「川浪宗睦文書」としてまとめ、主たる作成者である宗真の「川浪宗真文書」と区別することとした。これらの考察に基づく川浪文書の内部構造を、図1に示す。

フォンド「幽清会川浪家文書」は、「川浪宗真文書」と「川浪宗睦文書」の2つのサブフォンドを含む。幽清会が継承され文書が増える場合には、人物ごとにサブフォンドを追加していくことが可能である。「川浪宗真文書」は「茶道関連文書」「茶道関連外文書」の2つのシリーズから成り、「茶道関連文書」は5つのサブシリーズ、「茶道関連外文書」は2つのサブシリーズを含む。

以下、「茶道関連文書」に含まれる記録の概要と、川浪文書における位置づけを紹介する。

①川浪文書に含まれる辞令は、その多くが茶道講師を任ずるものであると推測される。岡山県第二岡山高等女学校の辞令を除いて授業科目は不明であるが、宗真が昭和18年8月

表4 — 幽清会川浪家文書（川浪宗真文書）の種類別点数・年幅

活動	分類	点数	年幅
茶道関連	①辞令	7	昭和18年～昭和21年
	②茶道許状	9	大正6年～昭和18年
	③点前・作法	8	昭和17年
	④御茶入日記	1	不明
	⑤茶会記	27	昭和25年～昭和38年
茶道関連外	⑥華道許状	6	昭和12年
	⑦和歌集	1	昭和13年～昭和15年

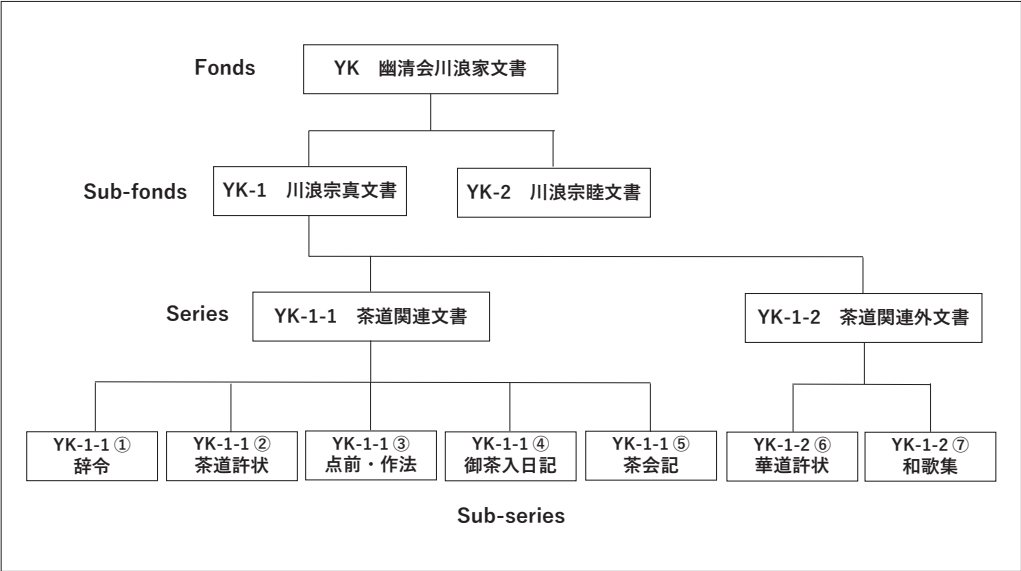


図1 — 幽清会川浪家文書の構造

に学校茶道の指導者を対象とした家元主催の教育訓練を受けていること³⁶⁾、聞き取り調査において学校茶道の普及にあたり大きな功績があったことが明らかになっていることから、岡山師範学校、岡山青年師範学校においても茶道教授者の任に就いたものと考えられる。これらは昭和20年前後に全国で盛んになっていった学校茶道の歴史を裏付け、岡山においても正課として茶道が取り入れられたことを示している。

②茶道許状は修道課程ごとに稽古を行うことを許可する「許し状」であり、家元により発行された記録である。裏千家においては修道者が直接家元に許状を申請することはできず、取次者を媒介して手続きが行われる。師事している師匠が取次者になることが一般的であり、許状にはこの取次者の氏名が記載されることから、師弟関係の証拠となる文書であると言える。

③点前・作法の記録であるが、川浪文書に存在するのは主に煎茶点前について記されたものである。宗真が和紙に墨書きで書き留めた点前記録であり、図入りで詳細な説明がなされている。茶書には煎茶の書物は含めないのが一般的であるとされるが³⁷⁾、川浪文書の煎茶関連記録については宗真の文化活動の一端を示すものであり、茶道文化を構成する一部として扱うこととしたい。

④の御茶入日記とは、茶銘³⁸⁾、摘み取られた日、数、詰茶の量と壺詰め茶師の氏名が記された文書のことである。茶師が茶の納入にあたり認める記録であり、茶壺の箱蓋の裏に貼り付けられる。川浪文書の御茶入日記は、形状、及び茶師の氏名のあとに花押が記されていないことから、宗真が茶を購入した際に御茶入日記の原紙を基に書き写したのではないかと考えられる（写真1参照）。

⑤茶会記は、いつ、どこで、誰が、どのような茶道具を用いて茶会を開催したかを知ることができる記録であり、一会ごとに完結する茶会の台本のような役割を果たす。一般に、席主が客を招く際に作成する「自会記」と、客として招かれた茶会について書き起こす「他会記」に大別される。川浪文書の茶会記は大半が「自会記」であり、1950（昭和25）年から1963（昭和38）年の間の岡山における茶道史の一端を伝えるものである。

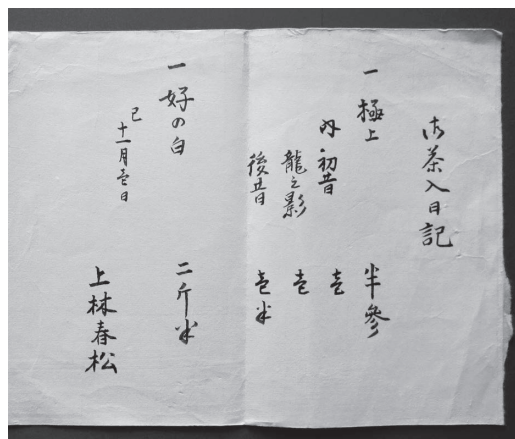


写真1 —— 巳十一月吉日 上林春松御茶入日記

36——川浪文書には昭和18年8月29日付「裏千家主催学校茶道教授者錬成会修了証」が存在する。この錬成会については、裏千家の機関誌『茶道月報』の記事からも開催を確認することができる（『茶道月報』昭和18年10月号、茶道月報社、29頁）。

37——谷見『茶人たちの日本文化史』、講談社、2007年、194頁。

38——茶の湯に用いる抹茶に付けられた名前。

2-4 資料群に適したアーカイブズ記述の検討

ここまで段階的整理に沿って概要調査、内容調査、構造分析を進めてきたが、本章の最後に、川浪文書の多角的利用を導くためのより実用的な記述について考察する。

アーカイブズ記述に関しては、International Council on Archives(ICA)による国際一般標準International Standard for Archival Description(General)(以下、ISAD(G))³⁹⁾が広く知られている³⁹⁾。ISAD(G)は記述単位の性質や規模にかかわらずアーカイブズ資料の記述に際して広く適用されることを狙いとしており、記述要素を柔軟に選択することができる⁴⁰⁾。ISAD(G)が取り入れるマルチレベル記述規則(Multilevel description rules)は全体から個(フォンド→シリーズ→ファイル→アイテム)の方向で記述を行うことを特徴とし、資料群の階層構造の再現と、レベル単位のコンテンツ・コンテキスト情報を与える⁴¹⁾。

小規模のアーカイブズ資料に対するISAD(G)の適用に関しては、松山龍彦氏による先行研究がある⁴²⁾。松山氏はISAD(G)について、フォンド、サブフォンド、シリーズ、アイテムといった階層構造が当てはめやすく、組織図等を通じて組織形態が把握できる文書群の場合は編成が容易であるが、「秩序だった整理のされていない非組織的文書については、編成前の調査段階として組織と文書の詳細を知るための記述作業が必要とされている実態がある」⁴³⁾と述べ、調査の初期段階でアイテムまたはファイルレベルの記述を一点ずつ行い、その結果から上位レベルのシリーズ、サブフォンドを含む全体の編成が可能であると考察している。

編成と記述の順序、編成の過程における階層構造の確定に関しては各レベルの定義も含めて議論が重ねられ、内的秩序の失われた資料群に階層を設定することの困難や、秩序を理解し階層を決定するにあたっての作業時間の問題が指摘されてきた⁴⁴⁾。これらの課題に対しては、人物の社会的経歴を軸にしたシリーズ編成による解決や⁴⁵⁾、フォンドとアイテムの二つの階層のみを捉える見解が示されている⁴⁶⁾。また森本祥子氏は、記述の標準化が

39—International Council on Archives, *ISAD(G), General International Standard Archival Description*, Second ed., 2000.

40—ICA, *ISAD(G)*, p. 7. 全26項目の記述要素のうち必須とされるのは、「3.1.1レファレンス・コード」、「3.1.2 タイトル」、「3.2.1作成者名称」、「3.1.3資料作成年月日」、「3.1.5記述単位の規模」、「3.1.4記述レベル」の6項目である。

41—ICA, *ISAD(G)*, p. 12. 階層構造によって定義される記述標準には、ほかにもカナダの国内標準である Rules for Archival Description(RAD)、米国アーキビスト協会(Society of American Archivist)が制定した Describing Archives: A Content Standard(DACS)がある。

42—松山龍彦「国際標準記録史料記述(ISAD(G))の小規模史料群への適用による編成記述の試み：好善社文書調査より」、『GCAS Report』vol.4、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻、2015年、42-62頁。

43—松山、前掲50頁。

44—例えば、Millar, pp. 218, 220. ISAD(G)の階層の定義をめぐる議論に関しては、橋本陽「概念としてのフォンド考察—ISAD(G)成立史を踏まえて—」(『京都大学大学図書館研究紀要』第17号、2019年、1-14頁)に詳しい。

45—加藤聖文「近現代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」、国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』、思文閣出版、2014年、181-199頁。

46—清水ふさ子「企業資料における経営者関係資料を読み解く—資生堂企業資料館『福原信三』資料の分

進む過程では記述要素や表現に関してゆるやかな解釈が生じると述べ、フォンドレベルのみをISAD(G)で記述し、下位レベルには既存の目録類を利用するといった可能性を展開している⁴⁷⁾。

アイテムレベルでの整理に関しては、ミュージアム・アーカイブズに先例をたどることができる。組織・機関の規模を問わず、ミュージアムにおいてはモノ資料が重要な意味を持つ⁴⁸⁾。唯一無二のモノ資料に関連するアーカイブズを管理するミュージアム・アーキビストにとって、アイテム記述は管理上の大きな課題の一つであるとされ、グループ単位の集合的な編成が促される一方で必要に応じたアイテム単位の記述も提起されている⁴⁹⁾。ニューヨーク近代美術館(The Museum of Modern Art: MoMA)の設置するニューヨーク近代美術館アーカイブズ(The Museum of Modern Art Archives: MoMA Archives)は近代・現代アートの研究センターであり、約90年に及ぶ美術館の歴史的記録や、20-21世紀における芸術史・文化史に関する一次資料を収集、保存、公開する機関である。アーティスト、画廊、美術史家、批評家の私文書や写真、オーラルヒストリー・プログラムで収集されたインタビューなども含まれ、研究者や美術館スタッフに重要なリソースを提供している⁵⁰⁾。シェルバーン美術館(Shelburne Museum)のアーキビストであるポリー・ダーネル氏は、芸術家たちの書簡をコレクションするMoMAでは資料をアイテムレベルで整理することがよくあるとした上で、アイテムへの関心が高い資料には詳細な整理が必要であり、重要なアイテムはシリーズからアイテムの段階的な整理を経ずに単独に扱うことができると述べている⁵¹⁾。このように、モノ資料と関係性の深いアーカイブズ資料を管理するミュージアムの整理論は、モノ資料(茶道具)の重視という共通の性質を持つ茶道資料の編成記述を考える上で参考となる。

加藤聖文氏は、日本の編成記述論の関心が精緻に向かいすぎる点に批判を向けつつ、「利用者が目的とする資料の基本的な性格を把握し、効率よくたどり着くための実用性に基づく編成記述」を重視すべきであると説いている⁵²⁾。MoMA Archivesの取り組みのように、書簡の差出人の氏名を基に索引(name index)を作成するなどアイテム単位の記述が検索の詳細化に寄与する例は、加藤氏の示す「実用性に基づく編成記述」モデルに相当するだろう。

析とISAD(G)記述の適用から－」、『GCAS Report』vol.6、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻、2017年、48頁、注72。

47——森本、前掲253-254頁。

48——Wythe, Deborah, Chapter 2: The Museum Context, Wythe, Deborah ed., *Museum archives: an introduction* 2nd ed., Society of American Archivists, Museum Archives Section, 2004, p. 9.

49——Wythe, Deborah, Chapter 6: Description, *Museum archives: an introduction* 2nd ed., p. 43.

50——The Museum of Modern Art Archivesホームページ、<https://www.moma.org/research-and-learning/archives/> (最終閲覧は2019年12月3日)。

51——Darnell, Polly, Chapter 5: Arrangement, *Museum archives: an introduction* 2nd ed., p. 38. ダーネル氏は、アイテムレベルの整理に携わるミュージアム・アーカイブズのスタッフには美術史の知識が必要であることも示唆している。

52——加藤、前掲182-183頁。

これらの編成記述をめぐる議論を踏まえ川浪文書を捉え直すと、出所が単一であり組織体系の存在しない計100点に満たない資料については、フォンド以下の各レベル（サブフォンド、シリーズ、サブシリーズ）のコンテンツ・コンテキスト情報の記述に加えて、口伝に象徴されるように秘匿性の高い文化から発生し残された記録のコンテンツに重点を置き、情報を捕捉できるようにすることが重要であると考ええる。つまり、川浪文書においてはアイテムレベルの記述の充実が資料検索にあたり有効であると言えよう。

ローラ・ミラー氏は、ISAD(G)、RAD、DACSに代表される階層構造によって定義される記述標準について、「保管指向型の標準(custody-oriented standards)」と呼称している⁵³⁾。本稿では、ミラー氏の提示する保管指向型記述のサンプルを参考に⁵⁴⁾、川浪文書の記述を試みる。本稿では紙幅の関係上、全体を示したフォンドレベルと、上記で検討したように資料一点一点に注目するアイテムレベルの記述の主要な部分を掲載する。記述要素はISAD(G)でも必須とされる6項目のほか、フォンドレベルでは「履歴」「範囲と内容」「伝来」「編成」「アクセス・ポイント⁵⁵⁾」を、アイテムレベルでは「範囲と内容」「物理的記述」「物理的状态」「関連組織・人物」「関連する場所」「備考」を記述する（表5、6参照）。アイテムレベル記述の「関連組織・人物」「関連する場所」はミラー氏のサンプル、ISAD(G)のいずれにも含まれない項目であるが、宗真の活動と密接である場所（茶道指導を行った学校名や茶会の開催地等）や人物（師匠や弟子）など行為と結びつく情報をアクセス・ポイントとして提供することが、茶道資料にとっての実用的な検索手段になると言えるだろう。

3 茶道資料の利用を促進するための多角的検索手段

本章ではこれまでの編成記述から得られた考察を踏まえ、茶道資料における利用者指向の検索手段について検討する。具体的には、茶道具に関する情報が集積された茶会記を基に、コンテンツ情報を一覧にした「茶会記リスト」を提示する。

3-1 利用者指向の検索手段の追求

段階的の整理論では、四段階目に位置づけられる多角的利用に関して、「利用者のさまざまな検索要求に応える」⁵⁶⁾ための発展的な検索手段の作成が示唆されている。また文化資源アーカイブズの構築に関する論考では、文化芸術の特性を考慮したメタデータの設定に

53— Millar, pp. 217-221. 保管指向型アプローチ(custody-oriented approach)に対して、記録の作成機関と記録を切り離し、機能とシリーズに焦点をあてた「機能型アプローチ(functional approach)」がある。この二つの姿勢は対立するものではなく、同一の機関内で公記録と個人文書とは異なるアプローチを取ることができる。

54— Millar, pp. 235-239.

55— アーカイブズ記述を検索、識別、見つけるために用いる名称、用語、キーワードなど。ICA, ISAD(G), p. 10.

56— 安藤、前掲112頁。

表5 —— 幽清会川浪家文書フォンドレベル記述

レファレンス・コード	YK
タイトル	幽清会川浪家文書
資料作成年月日	1917-1992年
記述レベル	フォンド
規模・物理的記述	段ボール箱1箱、61点、状・綴・簿冊・袋
作成者名称	川浪宗真（笠井淑子/川浪淑子/幽清会/よし子）ほか
履歴	川浪宗真は1901（明治34）年に生まれ、岡山市を拠点に活動した茶人である。茶道教授者として弟子を育成し、地域で度々茶会を主催するなど、生涯にわたり茶道の教育・普及に従事した。岡山市門田文化町に居を構え、邸内に茶室を開いた際には、裏千家第14代家元淡々斎から「幽清庵」という茶室名を与えられた。その後、活動の基本行動単位である社中を名乗る際に「幽清会」を団体名として用い、この名称は宗真－宗睦（宗真娘）－百合子氏（宗睦娘）と川浪家で代々継承された。1985（昭和60）年逝去。
範囲と内容	茶人の川浪宗真（1901-1985）が作成、収受した記録資料群。全体で61点、内訳は、教育機関からの講師嘱託辞令7点、茶道許状9点、点前・作法記録8点、御茶入日記1点、茶会記29点、華道許状6点、和歌1点である。
伝来	2018年4月茶道史研究家岡宏憲氏がインターネットオークションを通して古書店より入手した。
編成	61アイテムを含む。
アクセス・ポイント	<ul style="list-style-type: none"> ・茶道裏千家流 ・岡山県 ・淡交会岡山支部 ・今日庵千宗室 ・岡山師範学校 ・岡山県立岡山朝日高等学校 ・岡山市国清寺 ・岡山市後楽園鶴鳴館 ・岡山市黒住教会 ・岡山市景福寺 ・国清寺観音会 ・黒住教 ・煎茶源氏流 ・華道小原流 ・許状 ・学校茶道 ・茶会 ・茶会記 ・淡々斎 ・備前焼 ・虫明焼 ・辻利園 ・ほんじ園 ・芭蕉庵

表6——幽清会川浪家文書アイテムレベル記述（部分）

レファレンス・コード	タイトル	資料作成年月日	範囲と内容	記述レベル	規模	作成者名称	物理的記述	物理的状态	関連組織・人物	関連する場所	備考
YK-1	岡山師範の辞令	不明	辞令	アイテム	1		袋、202×86mm				
YK-2	岡山師範学校辞令	昭和十九年五月三十一日	辞令	アイテム	1	岡山師範学校	状、244×175mm		岡山師範学校	岡山師範学校	授業科目については不明。
YK-3	岡山医科大学辞令	昭和十九年十二月三十一日	辞令	アイテム	1	岡山医科大学	状、252×181mm		岡山医科大学	岡山医科大学	
YK-4	岡山青年師範学校辞令	昭和二十年三月三十一日	辞令	アイテム	1	岡山青年師範学校	状、253×179mm		岡山青年師範学校	岡山青年師範学校	授業科目については不明。
YK-5	岡山師範学校辞令	昭和二十一年五月三十一日	辞令	アイテム	1	岡山師範学校庶務課長	状、250×179mm		岡山師範学校、庶務課長	岡山師範学校	授業科目については不明。
YK-6	岡山師範学校辞令	昭和二十一年五月三十一日	辞令	アイテム	1	岡山師範学校	状、249×176mm		岡山師範学校	岡山師範学校	授業科目については不明。
YK-7	裏千家茶道許状（入門・小習）	大正六年十二月十日	茶道許状	アイテム	2	今日庵千宗室	状、195×528mm、195×528mm	包紙に汚れ、シミあり	千宗室、朽名宗久	今日庵	包紙あり。
YK-8-1 YK-8-2 YK-8-3	1) 裏千家茶道許状（小習）の写し 2) 岡山県第二岡山高等女学校同窓会辞令 3) 裏千家主催学校茶道教授者錬成会修了証	1) 不明 2) 昭和十八年四月一日 3) 昭和十八年八月二十九日	1) 茶道許状 2) 辞令 3) 茶道許状	アイテム	3	1) 不明 2) 岡山県第二岡山高等女学校同窓会 3) 今日庵千宗室	状、1) 239×131mm 2) 267×192mm 3) 190×268mm	包紙及び1) に汚れあり	2) 岡山県第二岡山高等女学校同窓会 3) 千宗室	2) 岡山県第二岡山高等女学校 3) 今日庵	包紙あり。
YK-9	裏千家茶道許状（雪月花）	昭和十三年二月二十七日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×525mm	包紙にシミあり	千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-10	裏千家茶道許状（茶通箱）	昭和十三年二月二十七日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×525mm	包紙にシミあり	千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-11	裏千家茶道許状（唐物）	昭和十三年二月二十七日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×525mm	包紙にシミあり	千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-12	裏千家茶道許状（台天目）	昭和十三年二月二十七日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×525mm	包紙にシミあり	千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-13	裏千家茶道許状（盆点）	昭和十三年二月二十七日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×525mm	包紙にシミあり	千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-14	裏千家茶道許状（和巾点）	昭和十四年三月一日	茶道許状	アイテム	1	今日庵千宗室	状、195×528mm		千宗室、守屋宗英	今日庵	包紙あり。
YK-15	昭和25年8月17日観音会月釜茶会記	昭和二十五年八月十七日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	状、196×526mm	シミあり		国清寺	
YK-16	昭和27年3月17日国清観音会会記	昭和二十七年三月十七日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	状、192×1055mm	シミあり		国清寺	
YK-17	昭和27年5月10日黒住卓月茶会会記	昭和二十七年五月十日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	状、195×700mm	シミあり	黒住教	岡山市黒住教	
YK-18	昭和28年10月18日黒住教献茶式添会記	昭和二十八年十月十八日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	状、192×723mm	シミあり	黒住教	岡山市黒住教本願道連会館	「淡交」昭和28年12月号に掲載あり。
YK-19	第四回黒住教献茶添釜芳名録	昭和二十八年十月十八日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	綴（紐綴じ）、525×195mm	シミあり、虫損あり	黒住教	岡山市黒住教本願道連会館	
YK-20	昭和29年7月17日七観音会添釜会記	昭和二十九年七月十七日	茶会記	アイテム	1	川浪宗真	状、194×522mm	シミあり		国清寺	
YK-42	平成元年12月13日井山宝福寺月釜会記	平成元年十二月十三日	茶会記	アイテム	1	川浪宗睦	状、205×522mm	変色あり		井山宝福寺	
YK-43	平成4年1月17日国清寺月釜会記	平成四年一月十七日	茶会記	アイテム	1	川浪宗睦	状、193×528mm	シミあり		国清寺	
YK-44	巳十一月老日上林春松御茶入日記	不明	御茶入日記	アイテム	1	上林春松（川浪宗真）	状、195×450mm		上林春松		
YK-45	壺飾紐結び	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	状、238×323mm				茶壺の飾り紐の結び方を実物付きで解説したもの。
YK-46	香付花月之記	昭和十七年八月十一日	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	状、382×515mm				
YK-47	煎茶点前「煎茶丸盆・平点前二碗（茶碗二ツ使ヒノ事）」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（紐綴じ）、245×168mm				
YK-48	煎茶点前「煎茶三、四、五、六、七、丸盆 角盆 菜」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（クリップ綴じ）、245×168mm	クリップ跡サビあり			
YK-49	煎茶点前「中机 煎茶涼炉」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（クリップ綴じ）、245×168mm	クリップ跡サビあり			
YK-50	煎茶点前「二重机（大机炭点前附）水指荘」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（クリップ綴じ）、245×168mm	クリップ跡サビあり			
YK-51	煎茶点前「小机涼炉点前」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（ビス綴じ）、245×168mm				
YK-52	煎茶点前「源氏流煎茶之菜」	不明	点前・作法	アイテム	1	川浪宗真	綴（紐綴じ）、247×168mm				

ついて言及されており、文化的特性が反映された資料情報を記述し、提供することの重要性が示されている⁵⁷⁾。利用者指向であり、かつ茶道の文化的特性を考慮に入れた検索手段とは何であろうか。

茶道は元来、音楽や美術、舞踊のように作品として残されず、映像で記録されることも行われない文化である。茶道において決められた「型」である所作は舞踊において動きを示す「振付」として捉えることが可能であり、茶会という公の場で客を前にして行う点前の披露を、舞踊で言う「公演（パフォーマンス）」と見なす考証も見られる⁵⁸⁾。しかし、その「型」の表象は記録化の対象とはならず、代わりに茶会を演出する書画・茶道具が茶会記に書き表されてきた。「幽清会川浪家文書の構造と内容分析」で説明したように、茶会記とは、茶会の日付、場所、席主名、使用した茶道具などの記録である。特に重要なのは茶道具に関する情報であり、茶会の記録の中心は、点前のパフォーマンス性ではなく、高度に洗練された芸術と匠の技が集合する道具に向かっていったと考えることができるだろう。

美術的にも価値を有する茶道具は、今日では茶道関係の美術館・博物館で収集、保存され、展示の核となっている⁵⁹⁾。これらの施設と並んで、個人もまた茶道具を集め、賞翫し、利用する。また、茶道関係美術館では学芸員らによって所蔵品に関する研究が行われ、展覧会や研究紀要においてその成果がまとめられている⁶⁰⁾。茶道具に関する研究は従来の茶道研究の中でも一つのジャンルを確立しており、例えば創元社版『茶道全集』においては全15巻のうち4巻が道具編（器物）に充てられ、書画、茶道具、茶人の所持品に至るまでの、由緒、作者、産地・素材・銘・形・色・寸法等の解説が収められている⁶¹⁾。

これらの茶道具への関心と利用の実態を踏まえると、茶道具に関する情報を提供できる検索手段が茶道資料にとっては利用者指向であり、それを実現するためには道具に関する情報が集積された茶会記に基づく探索資料の整備が有効であると考えられる。茶会記は川浪文書の中でも数量が最も多い記録であり、茶道情報誌においても必ず掲載されるなど、他者と共有する記録がほとんど存在しない茶道資料の中では例外的にアクセスにあたって

57——金翼漢「文化資源アーカイブの未来に向けて」、『GCAS Report』Vol.2、学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻、2013年、19-21頁。

58——谷川徹三氏は茶道の点前は能舞台や座敷での仕舞を連想させると述べ、「身体の所作を媒介とする演出の芸術」（傍点も原文のまま）として舞踊や演劇との比較分析を行っている。谷川徹三「芸術としての茶の構造」、谷川徹三・古田紹欽編『図説茶道大系第1巻茶の美学』、角川書店、1963年、44頁。

59——今日、茶道具を所蔵する私立美術館の多くは、近代以降茶の湯の担い手になった「数寄者」と呼ばれる人物たちのコレクションを基に設立されたものである。近代数寄者は主に政財界で活躍し趣味として茶の湯に親しんだ人物であり、財力を背景に茶道具収集に熱中したことで知られる。根津美術館（根津嘉一郎）、藤田美術館（藤田傳三郎）、逸翁美術館（小林一三）、五島美術館（五島慶太）、畠山記念館（畠山即翁）等はいずれも近代数寄者の遺産を受け継いだ機関であり、展示をとおして所蔵品を公開している。

60——例えば五島美術館研究紀要は、美術館の所蔵する古典籍及び資料の紹介、特別展に関する補遺、論文、調査報告から構成されており、書画・茶道具については展示と結びついた研究が多く見られる（『五島美術館研究紀要 第1号-第7号』、五島美術館、2013-2019年）。

61——『茶道全集』全15巻、創元社、1935-1937年。茶道具のほか、「茶道論・茶道史」「茶人」「茶会・作法」「茶室」「茶庭」「懷石」「文献」の7分野が含まれる。

の障壁が低い⁶²⁾。しかし、各地の茶会記がすべて雑誌に掲載されるわけではなく、紙媒体ベースでの刊行を背景として検索には大きな課題が横たわっている。こうした現状を踏まえ、川浪文書の茶会記から得られる茶道具に関する情報を整理した上で「茶会記リスト」の作成を試み、茶道資料の多角的検索手段として提示することとしたい。

3-2 「幽清会川浪家文書茶会記リスト」作成の試み

「茶会記リスト」の作成に先立ち、茶会記の概要を整理しておこう。

茶会記は、茶会の主催者（席主）が作成し、茶会の席で公開される記録である。主催者が作成する「自会記」は茶会の前に作成され、招かれた際に作成する「他会記」は茶会の後に書き起こされる。

茶会記に必要な情報は、①日時・場所・席主名・客名、②茶道具、③料理、④その他（点前、茶会の場で語られた会話、当時の社会情勢の記録など）の4項目とされる⁶³⁾。ほぼすべての茶会記に書き表されるのが、①と②である。ただし、①のうち、客名については茶会記とは分けて作成されることも多い⁶⁴⁾。②茶道具は、一定の書式に基づいて記載される。茶会記が成り立つために必要な要素は、日時・場所・席主名・茶道具の4つに絞ることができる。川浪文書の茶会記の例を写真2に示す。

茶会記データを集成し茶道具の組み合わせを示す考え方自体は新しいものではなく、茶道研究においては従来から取り入れられてきた手法である。しかし、研究目的により形式は様々であり、管見の限り茶道具の掲載は一部にとどまっている⁶⁵⁾。本稿の「茶会記リスト」

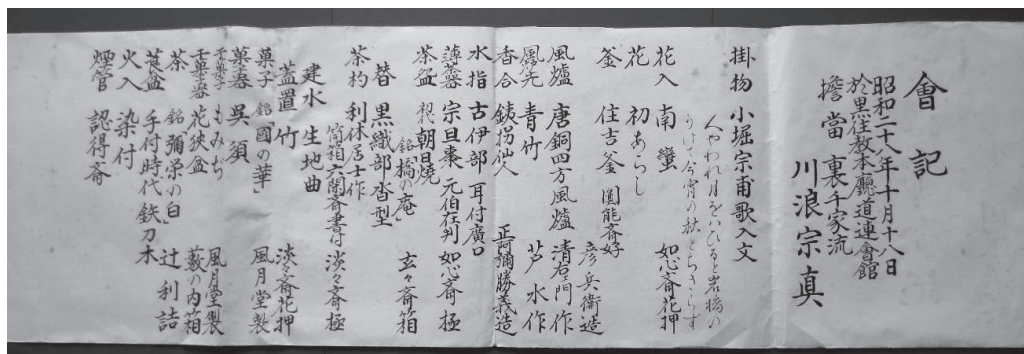


写真2 —— 昭和28年10月18日黒住教献茶式添釜会記

62—— 本稿の調査で主に用いた裏千家機関誌『茶道月報』『淡交』以外に、表千家の月刊誌『茶道雑誌』、江戸千家の会報誌『孤峰』においても茶会記の掲載が確認される。茶会記の原資料を利用することは他の茶道資料と同様に容易ではないが、茶会記のコンテンツ情報は茶道情報誌から得ることが可能である。

63—— 谷見『茶会記の研究』、淡交社、2001年、18頁。

64—— 川浪文書においても、客名が記された芳名録は茶会記とは別文書として作成されている（昭和二十八年十月十八日第四回黒住教献茶添釜芳名録、昭和三十三年四月十三日良寛茶会芳名録）。芳名録は人的ネットワークを捉えるための手がかりとなる資料であるが、茶会の都度必ず作成されるものではなく、川浪文書において残されているのは29会中2会である。

65—— 熊倉功夫氏は数寄者の茶風を紐解くにあたり、茶会記を用いて社交関係の把握、茶室の使い方、用いられた書画・茶道具の分析を行っているが、熊倉氏が取り上げているのは床、花入、香合、茶碗、茶入、茶

表7 ―― 幽清会川浪家文書茶会記リスト (部分)

レファレンス・コード	茶会名	開催日	数量	場所	席主名	本席床	花入	花	香合	釜	風炉	風炉先	炉縁	棚
YK-15	観音会月釜	昭和25年8月17日	1	国清寺	川浪宗真	露堂々 愈好斎筆	大幡焼旅枕 長左衛門作	秋海棠 野菊		虚無僧釜 切合せ				圓能斎好 寒雲棚
YK-16	国清観音会	昭和27年3月17日	1	岡山市国清禪寺	川浪宗真	幅 帷図 紫林伝衣筆	八幡竹一重切 玄々斎箱 銘戸津 ハッノ内	雲龍柳に蔽椿	蛤 利休好 菊置上 画師 法橋幽庵	住吉釜 玄々斎書付		白無地 淡々斎花押有	真塗 淡々斎書付 宗哲造	
YK-17	黒住早月茶会	昭和27年5月10日	1	岡山市黒住教会	川浪宗真	徳川太玄侯一行	一燈作 銘牡丹	梅花うつぎ	眞塗 不昧公花押	宝珠羽毛目	唐銅四方風炉 清左衛門作 即中斎花押	桐生地 竹橋逸山の画		桑小卓
YK-18	黒住教献茶式添釜	昭和28年10月18日	2	岡山市黒住教本廳道達会館	川浪宗真	小堀宗甫歌入文 人やわれ月をはひると岩橋のかけてそ今宵の秋とちきらす	南蛮 如心斎花押	初あらし	鉄拐仙人 正阿彌勝義造	住吉釜 圓能斎好 彦兵衛造	唐銅四方風炉 清右エ門作	青竹 芦水作		
YK-20	七月観音会添釜	昭和29年7月17日	1	岡山市小橋町国清寺	川浪宗真	雲崖筆一行「茶煙永日香」	貼施	紫式部月見草	文倚堂 菫子	朝鮮切合 西村弥三右エ門作		淡々斎好 露芝 合わせ箱		
YK-21	高田宗紀茶会	昭和29年11月7日	1	不明	高田宗紀	太田垣蓮月筆絵賛 白菊のまくら近くかはる夜そ夢も幾世の秋をへぬらん	竹一重切 淡々斎直書 銘「橋壽」	雁音	「かたそぎ」 淡々斎直書 同箱 利斎作	風炉釜 大西清石エ門作				
YK-22	観音会初釜	昭和31年1月17日	1	岡山市国清寺	川浪宗真	大徳寺大心和尚筆 鶴画賛	古備前 銘「吹雪」	曙椿	壽老人 惺斎箱 了入作	古芦屋 松竹梅地紋		とりのこ 淡々斎直書	真塗 淡々斎直書	紹陽棚
YK-23	景福禪寺梅見月釜	昭和31年2月25日	1	岡山市瓦町景福禪寺	川浪宗真	松月和尚筆「紅炉一點雪」一行	青磁	谷桑 藪椿	楽「地かミ箱」旦入作	刷毛目入「姥口道安形」 興兵衛作		鳥の子張 淡々斎直書	時代高台寺再絵	
YK-24	観音会早月茶会	昭和31年5月17日	1	岡山市小橋町国清寺	川浪宗真	圓能斎筆一行「緑水青山」	傘 竹心斎作	鉄仙	唐物 圓能直書 同箱	鶴首釜 庄兵衛極 初代寒雄作	面取道安土風炉	時代 あやめの絵 光琳画		
YK-25	夏季研究会添釜	昭和31年7月8日	1	岡山市後楽園鶴鳴館	川浪宗真	淡々斎筆「萬斛涼」	唐物	不明	波千鳥蒔絵 惣玄作	不明		五三桐		
YK-26	後楽園朝茶の会	昭和31年8月7日	1	岡山市後楽園鶴鳴館	川浪宗真	宝室明堂筆「瀧画賛」	宗全龍		茄子 文倚堂	朝鮮切合 弥三右エ門作		淡々斎好「露芝」 合わせ箱		
YK-27	聖良寛奉賛茶会	昭和33年4月13日	2	玉島圓通寺	川浪宗真	一休和尚墨蹟「季春の詩」真珠庵書付	南蛮切溜 如心斎直書	不明	交趾 亀松浦鎮信公箱 古筆了意極	古芦屋扇面 櫻地紋			高台寺再絵 六代宗哲作	高麗卓
YK-29-1	協賛茶席	昭和35年2月19日	1	岡山市天満屋	川浪宗真	淡々斎春來春來草日生	大幡焼	藪白椿	堆朱	西村弥三右エ門				
YK-30	後楽園茶摘茶会	昭和36年5月14日	1	岡山市後楽園鶴鳴館	川浪宗真	淡々斎筆 柳画賛 薫風白南來	裁掛 陶兵衛作	鉄仙木蓮	木影織襪 淡々斎箱 裕軒作	圓能斎好 住吉釜 彦兵衛作	唐銅四方 清石エ門作	遠山 竹喬絵		
YK-31	伊勢神宮献茶式奉賛席	昭和37年5月29日	1	伊勢神宮祭主職舎	三枝宗榮	重美 御西院天皇御宸翰 懷紙 光広卿文添 題 詠海辺鹿和歌これち又妻恋ひわびて小男鹿力鳴音にまかふ須磨の浦浪脇 交趾登り罍置物 水栗造	青磁管耳付	時のもの ほたん	認得斎好張子具 同箱	古芦屋真形 松竹地紋	唐銅七宝透 鬼面 清清作	淡々斎御家元御享 腰雲透し		
YK-32	朝日校文化祭共賛席	昭和37年9月30日	1	朝日校	川浪宗真	前大徳寺瑞巖 竹葉々起清風	宗全龍	秋草	鎌倉彫	三朝	青磁			円能斎花押 五行棚

水指	薄茶器	茶器	茶杓	茶碗	替茶碗	蓋置	建水	菓子	菓子器	茶	備考
染付	樽形 秋草蒔絵		淡々斎作 銘松虫	寒巖作 銘般若舟			伊賀轆轤	萩餅 芭蕉庵製	内瑠璃外柿		
古備前菱形木村長次郎作		銘 吉野山	銘 玉柳	白高麗洲濱箱書小堀権十郎政尹公古筆了意	大桶 紙雕園	淡々斎花押有 正玄造	飛騨曲	西王母、和泉屋製	呉洲		
古染付	玄々斎好 貝桶形 玄々斎花押		銘 飾太刀 淡々斎作	榎入作	光悦鉄壁写 長左衛門作 淡々斎書付	三ツ島居	平建水	柏餅 和泉屋製	蒔絵三方		
古伊部 耳付廣口	宗旦裏 元伯在判 如心斎極		利休居士作 箱六閑斎書付 淡々斎極	初代朝日焼 銘「橋の庵」 玄々斎箱	黒織部杵形	竹 淡々斎花押	生地曲	銘「國の華」 風月堂製	呉須	銘「彌栄の白」 辻利詰	芳名録あり。「淡交」昭和28年12月号に掲載あり。
南蛮写 割蓋 裏波蒔絵	榎斎好 イシ塗黒大棗 榎斎箱 宗哲作		淡々斎作歌 銘「天の川」 花色きぬのとりどりに 匂ふや秋の七日なるらむ	朝鮮平 銘「浅瀬」 淡々斎箱	赤楽 弘入作 共箱	竹 淡々斎花押	餌ふこ	笹の露 芭蕉庵製		ほんじ園詰	
萩焼 芋頭 即中斎直書 同箱 高麗左エ門作	時代優者蒔 絵 淡々斎直書 同箱							銘「菊のきせわた」 岡山風月堂製	嘉代子夫人好 千歳盆 淡々斎直書	銘「弥栄の白」 辻利園詰	席主は川浪宗真の弟子。
薩摩焼 梅の絵		膳所焼 銘「初笑」	圓能斎作 銘「萬歳楽」 共箱	大桶焼 島臺 淡々斎箱 長左エ門作	赤楽 曆手 吟啄斎箱 了入作、永楽日出鶴 妙全作	大桶焼 織部 写 淡々斎花押	生地曲	千歳餅 芭蕉庵製	緑高 宗哲作	九重の昔 辻利園詰	
渦模様 弘入作	「吹雪」大徳和尚 歌直書 宗哲作 たつる茶の淡きと深きなりぬるを語れや語れや埋火のもと		淡々斎作 銘「雪の朝」 世のちりをうづみて 清し雪の朝	信楽筒 圓能斎箱 銘「寒泉寺」寒泉寺春とは云へと 滝川の音さえ凍る心地こそすれ	祥意作	渦模様 弘入作	渦模様 弘入作	此花 風月堂製	織部手付		
引網 長入作	時代蒔絵 柳に鶯の絵		淡々斎作 銘「飾太刀」	鬼熊川	永楽 善五郎作	竹 淡々斎花押 正玄作	袋形 清右エ門作	柏餅 芭蕉庵製	蒔絵三方	弥栄の白 辻利園詰	
高取	しのぶ蒔絵		圓能斎作 銘「岩清水」	朝鮮平銘「浅瀬」 淡々斎箱	不明	不明	不明	不明	伊万里 秋海棠の絵		「淡交」昭和31年9月号に掲載あり。会記の掲載はなし。
膳所焼割蓋 朝鮮写	笹蒔絵 即中斎書付 近左作		淡々斎作歌 銘「天の川」 筒共箱	斗々屋	楽平茶盤銘「清風」 円能斎箱弘入作	竹 淡々斎花押	袋形 清右衛門作	銘「新涼」 風月堂製	ギヤマン	弥栄の白 辻利園詰	末尾に和歌あり。花色きぬのとりどりに 匂ふや秋の七日なるらむ
祥瑞耳付唐草模様共蓋	黒大棗 元伯在判 文叔箱 眞斎祿々斎 愈好斎外箱 如心斎了意 極 副 時代嵯峨蒔絵 柳に水鳥		利休作 六閑斎筒箱書 淡々斎外箱	一入作 黒 銘「常盤」 不見斎箱 一吸斎極 淡々斎外箱	乾山作 銘「吉野山」	唐物	唐銅口糸目 淡々斎箱 清右衛門作	銘「越路」 備前和泉製	青磁鉢	不明 辻利園詰	芳名録あり。
古備前	独楽 二代長寛		淡々斎作 銘 梅下風 古谷	御本	花三島	竹	飛騨	不明			
楽山焼 空庵作	茶桶 淡々斎箱 道寛作		淡々斎作 銘「ほととぎす」	赤「丹頂」 即中斎箱 榎入作	高麗写 竹泉作	竹 淡々斎花押	唐銅えふこ	野東志 備前和泉製	織部		
祥瑞 唐草耳付共蓋		玄々斎好 同箱 曙 東八代宗哲作	玄々斎共箱 同箱 歌銘 みもすそ河 圓能斎外箱	一入窓 銘常盤 不見斎箱 淡々斎宗匠外箱	高麗半使	神風 保全業補	南錦車軸 浄益作 淡々斎宗匠箱	不明	色義山切子鉢 フランス バカラ製		「淡交」昭和37年8月号に掲載あり。
虫明	ひさご蒔絵		淡々斎花押 銘秋空一声雁	高麗写 竹泉	王桶銘泊舟			織部 風月	安南写		

は特定の茶道具の分析を目指すものではないため、茶会記に記載されている項目を網羅的に取り込むこととする。

記述の形式については、各茶道具の羅列から成り記述要素が多くなるため、視認性の観点からリスト式での記述が適していると考えた。記述項目であるが、茶会を識別する要素として重要な「茶会名」「日付」「場所」「席主名」は基本項目とする。茶会記における茶道具の書き方には一定のルールがあり、おおよその順序は待合から始めて本席へ移り、床廻り、掛物、花・花入、釜と風炉、炉縁、水指、茶入、茶杓、茶碗、建水、蓋置、菓子、煙草盆となる⁶⁶⁾。大体の順序はこのとおりであるが厳格な決まりではなく、順序が入れ替わったり、追加されることもある。川浪宗真文書の茶会記27点を見比べても、並び順は一定ではなく、記載されている道具の項目にも変化があることがわかる。本稿では、川浪宗真文書の茶会記から収集できる以下38要素をすべて採録する。

寄付／待合／本席掛物／花入／花／敷板／香合／炭斗／羽箒／火箸／鉋／釜敷／灰器／灰匙／釜／風炉／長板／風炉先／炉縁／棚／水指／薄茶器／茶器／茶杓／茶碗／替茶碗／蓋置／建水／菓子／菓子器／干菓子／干菓子器／茶／苺盆／火入／苺壺／煙草入／煙管

データの入力には内容目録の一部を流用し、変更する形で作成を試みた。目録と同様にExcelを用い、行見出しにレファレンス・コード、茶会名、開催日、数量、場所、席主名、茶道具38要素、備考を並べ、列見出しには編年で茶会記を入力した。取り上げた茶会数は25会である。表7に「幽清会川浪家文書茶会記リスト」（以下、「茶会記リスト」）を示す。なお、紙幅の都合上、茶会は抜粋とし、茶道具については主要なもののみ掲載する。

3-3 「茶会記リスト」の利用と発展

本節では「茶会記リスト」の活用方法を検討し、さらに優良な検索手段とするための可能性を探索したい。

「茶会記リスト」の利用者の先頭に挙げられるのは、茶の湯の実践者である。季節感ともてなしを尊ぶ茶道においては、茶人はどの茶碗にどの茶器を組み合わせるかといった道具の選択に心を配る。道具組みにあたっては教本があるわけではなく、所有する道具も一人一人異なるため、感性和素養が求められる作業であると言える。「茶会記リスト」は季節にふさわしい道具を選び、組み合わせを考える際の参考となるほか、道具選びという行為の痕跡をとどめる日記のような役割も果たすだろう。

従来から茶会記を情報源としてきた研究者にとっても、有用なデータとなる。茶会の開

杓のみである（熊倉功夫『近代茶道史の研究』、日本放送出版協会、1980年、217-242頁）。また谷見氏は、1万5千会以上の茶会記のデータ蓄積とその分析結果を基に、茶道具、書画、陶磁器、料理、点前の変遷といった茶道の諸相を論じているが、会記に現れた人物、茶道具、料理等一つ一つの構成内容の追求を狙いとしていることから、茶会記に記されたすべての要素の一覧という形式は取っていない（谷見『茶会記の研究』、淡交社、2001年）。

催時期、場所、席主名といった基本情報に加え、茶道具については識別に関わる多量の情報（産地、素材、銘、作者、箱書き等）に基づく詳細な調査を可能にする。道具の研究を深化させると共に、時代の流行を分析し、茶人の嗜好や茶会の趣向を掴むといった用い方もできるだろう。

このように「茶会記リスト」は茶人、研究者にとっての活用が見出せるが、より発展的な検索手段とするために、二つの展望を示し本節の結びとしたい。一つ目には、茶道具がモノ資料であるという観点から考えられる、美術館・博物館における資料記述との連携の可能性である。美術館・博物館で管理されているモノ資料情報、モノ資料の管理情報などと「茶会記リスト」をリンク付けることで、来歴や使用に関する追加情報を提供し資料記述を充実させることができるだろう⁶⁷⁾。二つ目は、茶会記データの収集範囲と対象を広げ、「茶会記データベース」を構築する可能性である。茶会記は、作成者、作成年代、地域が異なってもほぼ同様の形式で作成される資料であるため、「茶会記リスト」には他の茶人が作成する茶会記を取り込むことができ、永続的にデータを拡張することが可能である。実践にあたっては、茶道修道者のコミュニティ（例えば各地の裏千家淡交会や学校茶道といった大規模な組織から、一人の師を中心に形成される小規模グループまで）を単位としたデータの蓄積が考えられる。茶人名や開催場所、作成日、道具ごとの検索機能を持たせることに加えて、茶道具のコンテキスト情報を付加し、画像データを取り込むことで、さらに優良な検索手段となることが見込まれる⁶⁸⁾。

川浪文書は現在、あるアーカイブズ機関への寄贈に向けた手続きの途上にある（2019年12月現在）。川浪文書の「茶会記リスト」を土台として地域の茶会記データの取り込みが進み、茶道資料の利用が促進されることを期待したい。

4 おわりに

本稿では、茶道資料「幽清会川浪家文書」を事例に、段階的の整理論に則った編成記述に基づく検索手段を示した。段階的の整理の第一段階から第三段階までの過程で資料群のコンテンツ・コンテキスト・構造を明らかにし、編成記述に関する議論を踏まえ、より実用的な記述を検討した。結果、マルチレベル記述規則に基づくフォンド以下の階層単位の記述に加え、アイテムレベルに重点を置きコンテンツ情報を豊かにすることで、優良な検索手段になることを示した。さらに多角的利用を実現するために、利用者指向であり、かつ茶道資料に適した検索手段について考察し、茶道具に関する情報の提供が利用のニーズと関

67— 博物館における資料情報の種類、博物館資料情報の標準については、嘉村哲郎「ウェブ時代の博物館資料情報とデータモデル」（『アーカイブズ学研究』第25号、日本アーカイブズ学会、2016年、56-78頁）を参照。

68— 茶道具の書き方にはルールがあるが絶対的な基準ではないため、茶道具名の書き方が統一されておらず、同じ茶道具を用いても会記ごとに記述が異なることが頻繁にある。本稿の「茶会記リスト」では原資料の表記を尊重したが、データベースの構築に際しては、利用の観点から一定のルールを設定し語彙の統制を図る必要がある。

心を満たす有用なデータになる可能性を指摘した。アウトプットとして、茶会記に基づいた検索手段「幽清会川浪家文書茶会記リスト」を提示し、茶人や研究者にとっての利用可能性の広がりを示した。利用者はこれらの検索手段により資料とコンテンツ情報の探索が可能となり、利用が促進されることで茶道資料の価値が高まっていくと言えよう。

茶道研究家の筒井紘一氏は、「茶書とは、茶道の成立以来現代に至るまで、茶の世界にふれながら生きてきた人々の重要なメモリアル・モニュメント」⁶⁹⁾であると述べている。本稿で検索手段の基礎として取り上げた茶会記を例にとると、茶会の記憶を留めるための要素となるのは、モノ（茶道具）、場所、人（行為者・参加者）である。「茶会記リスト」は、いずれかの構成要素の分析を深めるだけでなく、これらの三者を結びつけ、その絡まり合うコンテクストの変遷の追求を可能とするだろう。とりわけ重要なのは、モノ、場所と一体になった茶会記の中でのみ、茶人の活動の明らかな痕跡を残すことが可能であると言うことである⁷⁰⁾。さらには、本稿で示した検索手段は、茶道文化の担い手であり、地域の活動等において功績のあった茶人の顕彰の一助となり、地域文化史の発展にも資するものとなる。「茶会記リスト」を発展的な検索手段とするための二つの提案－美術館・博物館における資料記述との連携、茶会記データの収集範囲と対象を広げた「茶会記データベース」の構築－については、今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿執筆にあたって資料利用の承諾と情報提供をいただいた川浪百合子氏に、深い感謝を申し上げる。また、調査時の資料所有者である岡宏憲氏には、資料の提供、共同調査等多くのご支援をいただいた。お礼を申し上げたい。

69——筒井紘一『茶書の系譜』、文一総合出版、1978年、11頁。

70——茶人の痕跡の薄さについて、谷見氏は「第二次大戦後の茶会記に記録された人物の素性は、百年後といわず五十年後には、家元とごく少数の人物を除いてわからなくなってしまうであろう」と警鐘を鳴らしている。谷、前掲89頁。